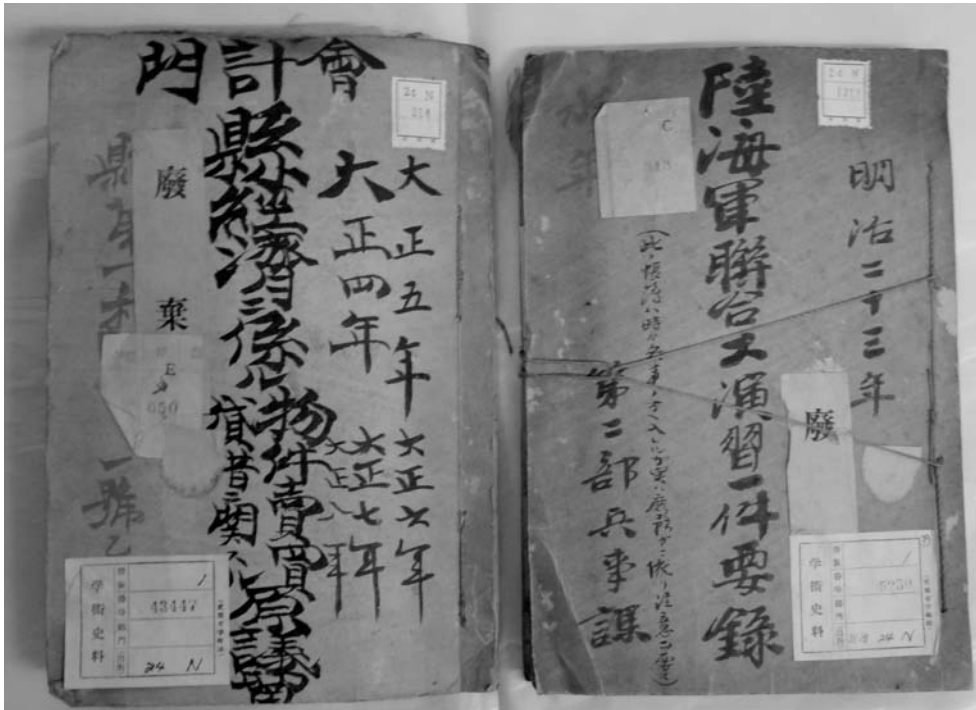


公文書を管理することの難しさ

一流転の愛知県庁文書



愛知県庁文書：当時の県庁の判断では「廃棄」とされたが、現在では貴重な「学術史料」となっている。

意外な話だが、国文学研究資料館には、五二万点もの歴史資料を所蔵している。これらはもともと一九五一年に開設された文部省史料館（一九七二年の国文研誕生とともに附置機関となって史料館と改称）が収集してきたもので、今でも時々、史料の寄贈がある。史料は江戸時代から現代までが中心で、江戸時代の大名家や地方の地主から近代の官僚や軍人まで多種多様で、地域も全国にわたっている。近代以降になると日本人の行動範囲も広がるので、中国や朝鮮に関わる貴重な史料も含まれる。

また、こうした民間にあった史料以外にも県庁や町村役場の公文書もかなりの数、所蔵されている。公文書管理法が施行されて、公文書管理がマスコミでも取り上げられるようになった昨今ではちょっと考えられないが、ほんの数年前までは、公文書が知らないあいだに無くなって、古書店で売り出されていたなんていう話はよくあった。国文研で所蔵されている公文書の多くは、昭和三十年代に全国で行われた昭和の大合併の際、廃棄されたものが市場に出回っていたものである。そのなかで、今回取り上げる愛知県庁文書は、やや特殊な経緯をたどって当館に「流れ着いた」ものである。

愛知県には愛知県公文書館があるが、戦前の県庁文書はほとんど無い。空襲で焼けたというよくある話の原因ではなく、次のような経緯があった。

日中戦争が始まった一九三七年、愛知県では新庁舎を建てることになった。その際、書庫にあふれていた文書を整理（＝廃棄）しようとしたところ、これを聞きつけた尾張徳川黎明会が、研究に使いたいという事で引き渡しを要請し、結局、県庁はこれに応えた。今では信じられない話だが、旧藩主が関係する財団だからか、昔はこんなことができたのである。

さて、県庁文書を譲り受けた黎明会だったが、その数は一万冊近くにもおぼろ、しかもあまりにも内容が雑多だったので、太平洋戦争が始まるとその半分は処分されてしまった。それでも残りの半分は戦火をくぐり抜けることができたが、戦後になると社会の混乱のなか、華族制度も廃止となって、黎明会もこれまでの組織を維持できなくなった。そうしたなかで、一九四九年に文部省史料館の設置が決まったことを受けて、県庁文書の大半が寄贈されることになり、これが今につながっているのである。

愛知県庁文書の流転の歴史は、さまざまなことを私たちに考えさせてくれる。役所にとって公文書はどう見られているのか？ 今の公文書管理にもつながる課題として参考になろう。廃棄された文書はどんなものだったのか？ 今では愛知県の近代史の一級資料であるが、逆にいうと当時は不要なものとされたのであって、公文書を評価することの難しさを実感できる最良の教材といえよう。公文書管理担当の職員の方には是非、当館の愛知県庁文書を見ていただきたいものである。

（加藤聖文）